

# 学位論文審査の要旨

学位申請者	小松 恭子 ジェンダー学際研究専攻2017年度生		論文題目	職業とタスクからみる女性の就業 —日本版O-NET・PIAACを用いた実証分析—
審査委員	主 査:	永瀬 伸子 教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	西村 純子 准教授		「否」の場合の理由
	副 査:	大森 正博 教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	杉野 勇 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	松浦 司 准教授 (中央大学)		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (社会科学)		<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている	
(英語名)	(Ph. D. in Labour Studies)		<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている	
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について

## 学位論文審査・内容の要旨

本論文は、日本の女性労働のありようを職種とタスクに注目し、その変化を時系列的に、また子どもがいることなど家族状況と関連づけて実証的に分析したものである。大きい特徴の1つは、最近公開された職業情報提供サイト「日本版O-NET」をいち早く利用し、国勢調査の集計データ(1990年～2015年)の職業分類に、定型/非定型、知的/身体的といったAcemoglu and Autor(2011)型のタスク分類を適用し、どのような仕事が増えてきているのかについて、特に女性に着目して分析している点である。そして女性の職種別人口の変化からタスクの時系列的な変化を図示し、女性において二極化現象が顕著であることを示した。またOECD「PIAAC調査」の個票やリクルートワークス研究所「全国就業実態パネル調査」を用いて、これまで十分に注目されていなかった、より詳細な職種分類や、認知的なスキルの視点から、女性の就業や賃金への影響について分析している点も特徴である。PIAACの個票データを用いた分析からは、認知スキルが就業確率に与える影響や認知スキルの利用が賃金に与える影響の男女差について国際比較を行った。日本では、認知スキルの高い女性であっても、子どもがいる場合には就業確率が下がる度合いが、比較したノルウェー、英国などと比べて大きいことを指摘した。また女性は男性以上に、スキル利用の頻度が賃金に与える正の効果が大きいことを示した。さらに全国就業実態パネル調査(2016年～2018年)の個票データを用いて、自身で従来より詳しい事務職の職業分類を作成、職業の違いが初職継続に与える影響や出産離職後の再就職に与える影響についても分析している。職種やタスクを用いた分析は、日本の労働研究ではいまだ新しい分野である。本論文は女性労働に異なる視点から光をあて、データ分析として追求した論文として評価できる。審査委員会は、令和3年12月2日、令和4年2月7日の2回行われた。適切な修正が行われ、公開審査会は令和4年2月21日に行われた。発表はわかりやすく、質疑も適切であった。最終審査の結果、審査委員会全員一致で本学大学院人間文化創成科学研究科の博士の学位の水準に十分に到達しているとして合格と判断し、博士(社会科学)Ph. D. in Labour Studiesの学位を授与する事を決定した。